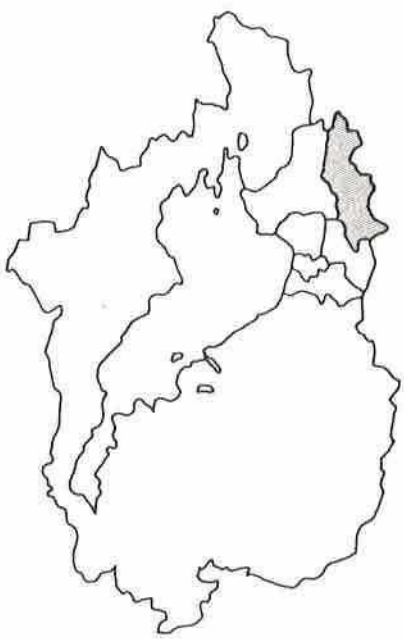
伊吹町文化財調査報告書第15集

上平寺城跡遺跡群
推定若宮（わかみや）・浅見屋敷跡（あさみやしきあと）

発掘調査報告書



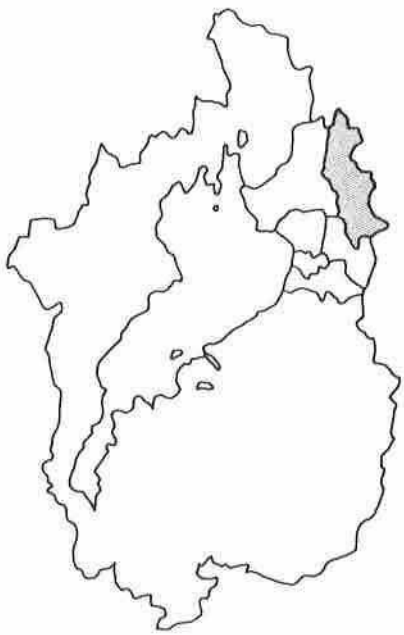
2002. 3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

伊吹町文化財調査報告書第15集

上平寺城跡遺跡群
推定若宮・浅見屋敷跡

発掘調査報告書



2002. 3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

序

滋賀県の各地から望むことができる伊吹山は、神の住む山・霊山として、寄りつき難い姿を見せることもあれば、薬草をはじめ、さまざまな山の幸を与えてくれる恵みの山として、山麓にくらす人々を温かく包んでくれる、そんな山でもあります。

この伊吹山の山腹から山麓一帯は、県内有数の縄文遺跡密集地であり、比叡山などとともに、山岳信仰の拠点として多くの山岳寺院が展開した宗教的中心であり、中世には北近江の守護大名・京極氏が館や山城を築いた政治的拠点でもありました。

この報告書では、京極氏の館に伴って整備された家臣団屋敷での発掘調査の成果を紹介いたします。調査範囲はごくわずかですが、近江では最古級の城館に伴う石垣を検出するなど、いままで、知られていなかった武家屋敷内の様子を垣間見ることができました。

調査に際し、地元上平寺区の皆様のご理解・ご協力と、調査に参加いただいた皆さん、ご指導を賜りました関係諸機関・各位に、厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

伊吹町教育委員会
教育長　松　嶌　膽　龍

例　　言

1．本書は、滋賀県坂田郡伊吹町大字上平寺周辺に所在する上平寺城跡遺跡群のうち、家臣屋敷跡が集中する「高殿地区（上平寺南館遺跡）」の発掘調査報告書である。

2．本調査は、特定地方道路町道寺林上平寺線交差点改良工事に伴うもので、滋賀県教育委員会文化財保護課の指導を受け、伊吹町教育委員会が実施した。

3．発掘調査は、平成12年度に実施し、平成13年度に整理作業と報告書の作成を行った。

4．現地調査は、伊吹町教育委員会生涯学習課主任・髙橋順之が担当した。なお、調査参加者は下記とおりである。

調査作業員

滝上庄司　三宅美一　滝上光子　滝上美代子　的場育代　山本直人　田中真二
堤　光弘　安田郁子

5．本書は髙橋順之が執筆・編集した。

6．調査記録および出土品は、伊吹町教育委員会で保管している。

目　　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 2

第２章　発掘調査の経過 …… 3

第３章　発掘調査の結果 …… 4

第４章　まとめにかえて …… 10

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 1

第２図　高殿地区屋敷配置推定図 …… 3

第３図　検出遺構平面図 …… 5

第４図　Ｔ２石列・礎石遺構実測図 …… 6

第５図　Ｔ１石垣遺構実測図 …… 7

第６図　出土遺物実測図（１） …… 8

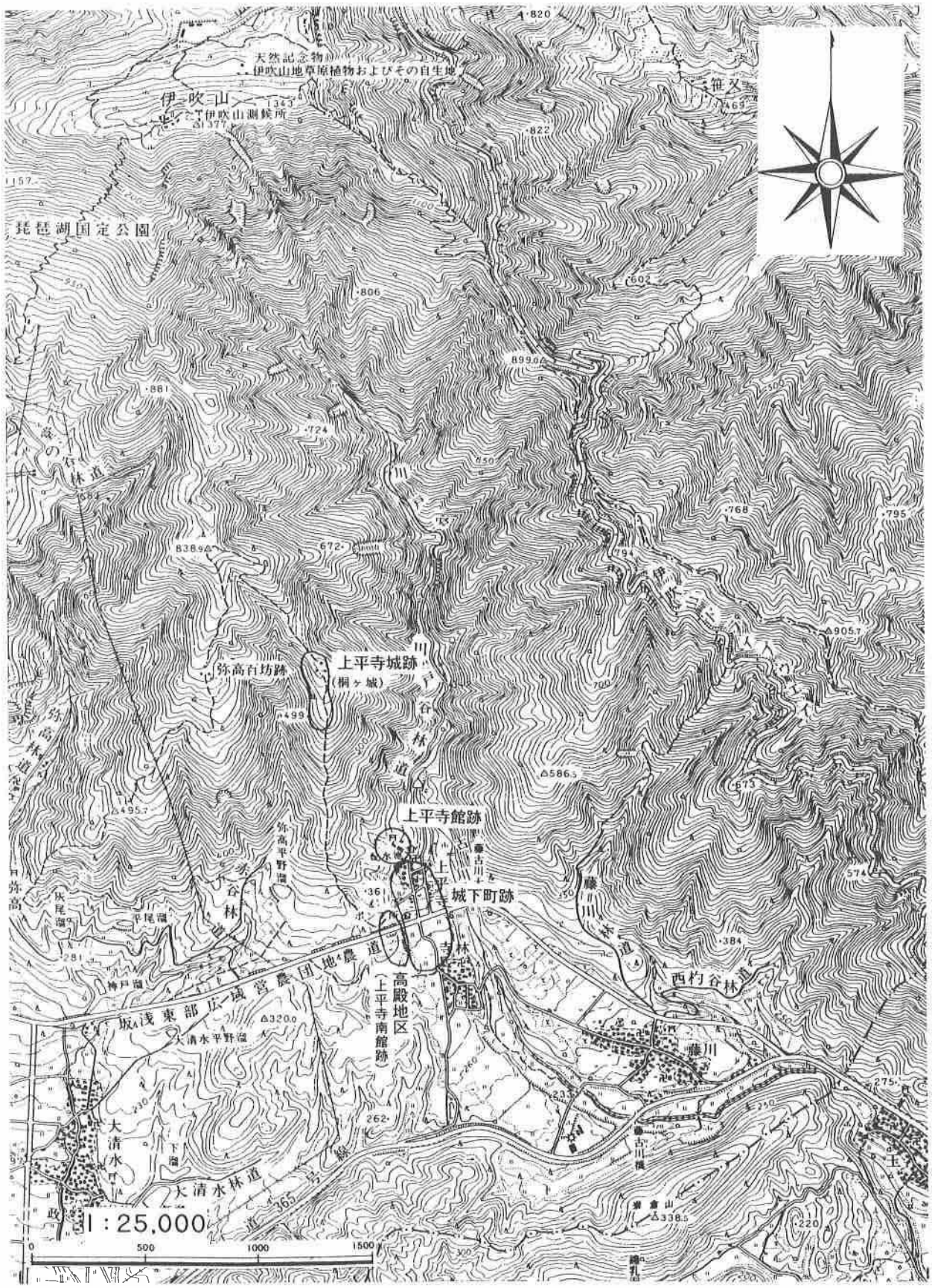
第７図　出土遺物実測図（２） …… 9

図　版　目　次

図版１　調査風景・T1 全景・T2 全景

図版２　T3 全景・Ｔ４全景・T3 土師皿一括出土遺構

図版３　石垣遺構全景・石垣遺構中心部・石垣遺構西側


天然記念物
伊吹山地草原植物およびその自生地
伊吹山
伊吹山測候所
笹又
琵琶湖国定公園
上平寺城跡
(桐ヶ城)
弥高百坊跡
上平寺館跡
上平寺城下町跡
高殿地区
(上平寺南館跡)
弥高平野溜
清水平野溜
大清水
大清水林道
西杓谷林道
藤川
藤川本道
坂浅東部広域営農団地
1:25,000
0
500
1000
1500

第１図　遺跡位置図

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

坂田郡伊吹町は滋賀県の北東端に位置し、東は岐阜県関ケ原町と春日村、北は岐阜県坂内村、西と南は滋賀県浅井町・山東町に接する。県の最高峰伊吹山（標高 1377m）の山麓と、伊吹山地北部に端を発する姉川の峡谷部に広がる農山村である。

この地域は東日本と西日本の境界にあたり、古代の幹線道である東山道（中山道）や北国街道が通り、今日では東海道新幹線や名神高速道路などが集中する交通の要衝である。

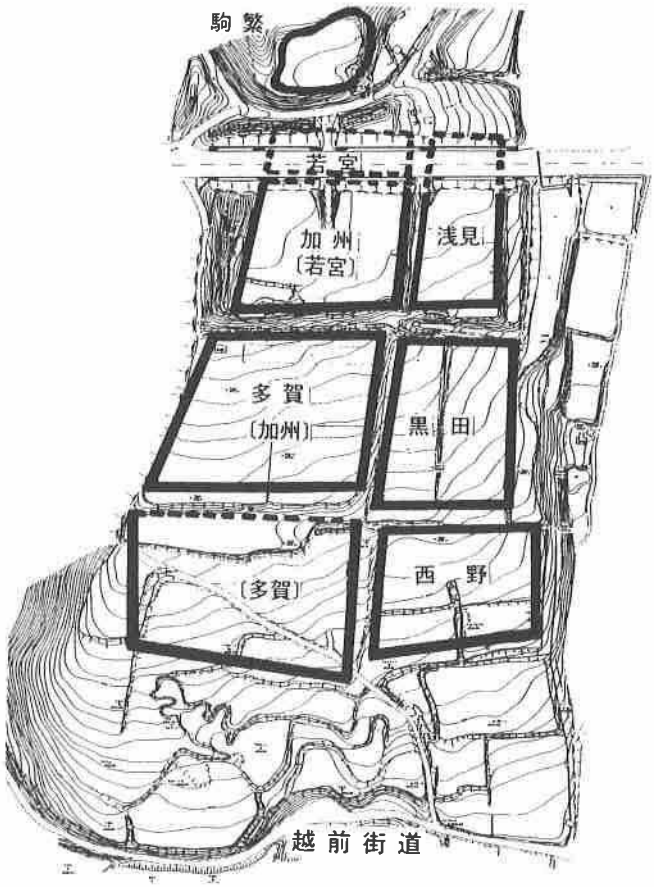
上平寺城跡遺跡群は、この伊吹山南麓地域に展開する。この遺跡群は、中世に北近江を支配した京極氏に関連するもので、京極高清が15世紀末から16世紀初頭に整備したものである。遺跡群は、京極氏の屋形を中心とした「上平寺館跡」、家臣屋敷が配置された「高殿地区」（遺跡名「上平寺南館遺跡」）、山城「上平寺城跡」（苅安城・桐ヶ城）と、館に伴う城下町跡や長福寺などの寺院跡で構成される。さらに、上平寺城跡の西側にある山岳寺院「弥高寺跡」も京極氏が城郭として利用している。

さて、上平寺館や高殿地区・城下町は、藤古川扇状地の右岸扇頂部付近にあり、東側は藤古川の急峻な谷、西側は高殿地区がある尾根と、『上平寺城絵図』に「要害谷」と記されている谷によって守られている。この『絵図』は、近世になって現地の遺構を忠実に描き、伝承を加味して作成されたと考えられる信憑性の高い資料で、山城跡や館跡の現存遺構や道路、地割などが現況とかなり合致している。

高殿地区で、平成10・11年度に行った地形測量では、約60m四方の屋敷跡など方形に地割された屋敷跡を８区画前後確認した。（第２図）『絵図』の屋敷区画には、尾根の中央を境にして西側に「若宮」「加州」「多賀」、東側に「浅見」「黒田」「西野」の名称が記載されており、いずれも北近江各地を拠点とする一族衆及び有力被官である。今回の調査区は、「若宮氏」と「浅見氏」と推定される屋敷跡のごく一部である。「若宮氏屋敷跡」は、東西約60m×南北約45mで、西に高い土塁を設け、南と東の一部にも土塁がある。北側は、二本の町道により改変されているが、かつては『絵図』で「駒繋」と表記される曲輪との間の堀切道に面して土塁が設けられていた。『絵図』には、この区画内に１本の線を境に「若宮」と「加州」が南北に記載されており、現在も「カシュウヤシキ」と呼ばれている。他の区画が独立して描かれているのとは対照的で、土塁囲いの一区画に２つの屋敷が混在していたのであろうか。今回の調査地点は、現時点では一応「若宮氏屋敷」と推定した。この東側にある「浅見氏屋敷跡」は、東西約 30m×南北約 45mを測る。

京極氏は、仁治二年（1241）に近江守護佐々木信綱が４人の子に近江の所領を分配し、四男氏信に愛知川以北の北近江六郡を与えたことに始まる。南北朝期には、幕府の有力者として近江でもしだいに宗家六角氏を圧倒する。しかし、応仁の乱後に京極家は分裂し、高清と政経・材宗の対立に有力家臣の内紛が絡み混乱状態が続く。その後、永正二年（1505）に日光寺（近江町）で和睦して、北近江を再統一する。この時の拠点が上平寺である。ただし、上平寺館は大永三年（1523）の国人一揆で守護館としての機能を失った。

若宮氏は坂田郡飯（近江町）を拠点とした国人領主で、古くから京極氏の有力被官であった。また、浅見氏は、東浅井郡尾上（湖北町）に城を構えた国人で、大永三年のクーデタで盟主的な役割を果たすなど、京極家被官の中ではかなりの力を持っていたようだ。



第２図　高殿地区屋敷配置推定図

第２章　発掘調査の経過

今回の調査は、町道の交差点改良工事に伴い実施した。工事により、高殿地区の北側が幅約３ｍ前後の掘削を受けることとなり、担当部局と滋賀県教育委員会および町教育委員会で協議をすすめた。すでに、50年代前半に建設された町道藤川相撲庭線により、若宮屋敷の北側は破壊されていた。平成６年には、町道の北側にわずかに残っていた土塁と堀切が、町道川戸線により改変され、現状がかなり変更されている地区でもある。

現状は山林で、調査は、掘削が及ぶ範囲を対象として、調査を進めた順にＴ１～Ｔ４の調査区を設定して地下遺構の確認をおこなった。調査面積は約240㎡で、調査は平成12年９月21日から12月12日の期間に実施した。

発掘調査は、Ｔ３・Ｔ４は人力で遺構検出面まで掘削し、Ｔ１・Ｔ２は遺構検出面直上まで重機で掘り下げたあと、作業員による遺構の検出と遺構内の掘削、遺物の検出をおこない、写真撮影と実測図の作成により記録した。

第３章　発掘調査の結果

Ｔ１（第３図・第５図）

若宮氏屋敷跡は、昭和50年代の町道工事の際に、町道からの進入路が中央付近に設けられており、これより東側に設定した調査区をＴ１とした。幅約４ｍ、長さ約25ｍを測る。調査区の東端には、上場幅約60cm、下場幅約3.5ｍの土塁がある。

土層の堆積は、約15cm前後の表土をはぐと茶褐色土層となり、西側では、この下に黄色土が現れる。中央付近では締まった黒色土となり、中央から東は締まった黄色土層になる。これが遺構面と考えられた。

遺構は、調査区東側で直径30～40cmのピット３個を確認したのみであるが、特筆すべき遺構として、調査区の中央やや東寄りで検出した石垣遺構がある。後世の開墾等により最高で３段しか残っていなかったが、検出した遺構は東西幅約４ｍ、東側では長さ約６ｍの２～３段の石垣が調査区の南北に伸び、東側に石垣の面を向ける。西側の石垣は、南北約2.5ｍで西側に面を向けている。二つの石垣は、いずれも調査範囲外の南側へ続く可能性がある。また、両石垣間には平らな上面をほぼ同じ高さに合わせて石が配置さている。第５図の石アとイは、他の石が横位であるのに対して立てた状態で出土していることから、石垣のコーナーに当るのではないだろうか。土層断面の観察では、裏込めの栗石も認められた。

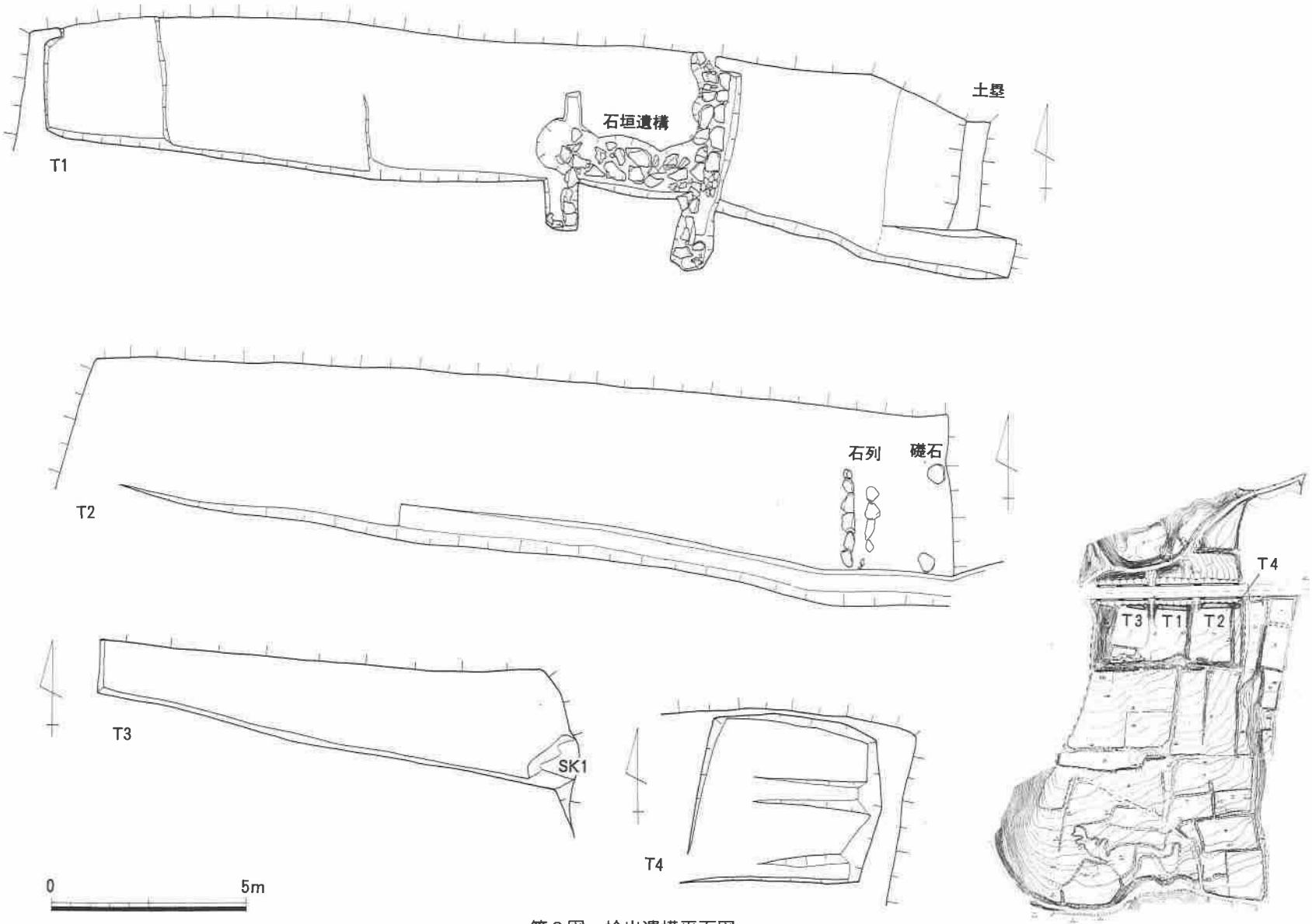
調査区の北側は昭和50年代に道路工事により掘削されているが、当時もこのあたりで大量の石が出たといい、石は道の北側に祀られている。これは石垣遺構が北に延びていたことを示している。

Ｔ２（第３図・第４図）

推定浅見氏屋敷跡に設定したＴ２は、幅約3.5～4.5ｍ、長さ約22ｍを測る。土層の堆積は、表土・黄色土・黄色粘質土・黒色土・茶褐色土で、西側では地表面より約50cm下で、遺構面と考えられる暗黄茶色土を検出し、この面は東へ傾斜している。

この調査区からは、ピットや土坑などの遺構は検出しなかった。また、遺物の出土も皆無であったが、調査区の東端で平行して並ぶ石列と、礎石と思われる２個の石を検出した。西側の石列は、天場をほぼ同じ高さにそろえる50cm前後の石が、南北に約2.5ｍ並ぶ。東側の石列は約2.2ｍを測る。両者の間隔はほぼ30cmで、内側に面を合わせていることから、対になる石列と考えられる。礎石は、石列の中心から1.7～1.9ｍ東側で検出した。北へわずかに開いている。北側の礎石は約50cm×40cmの不等辺六角形をしている。南側の礎石は径約45cmの不正形である。両者の間隔は約1.8ｍである。

この礎石から東は斜面になっており、Ｔ２ではこの他に礎石やその痕跡を確認しなかった。屋敷地の端に立つ塀の礎石と考えられる。また、石列はこの塀にともなう雨落ち溝ではないだろうか。



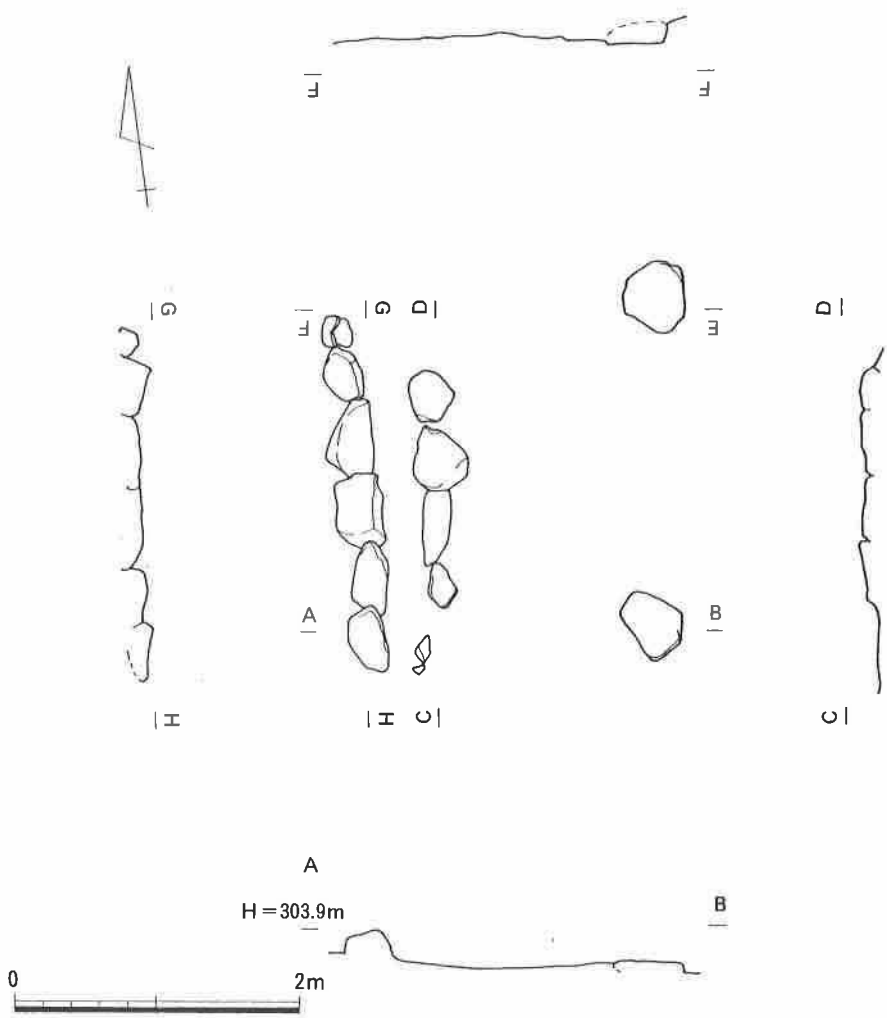
第３図　検出遺構平面図

Ｔ３（第３図）

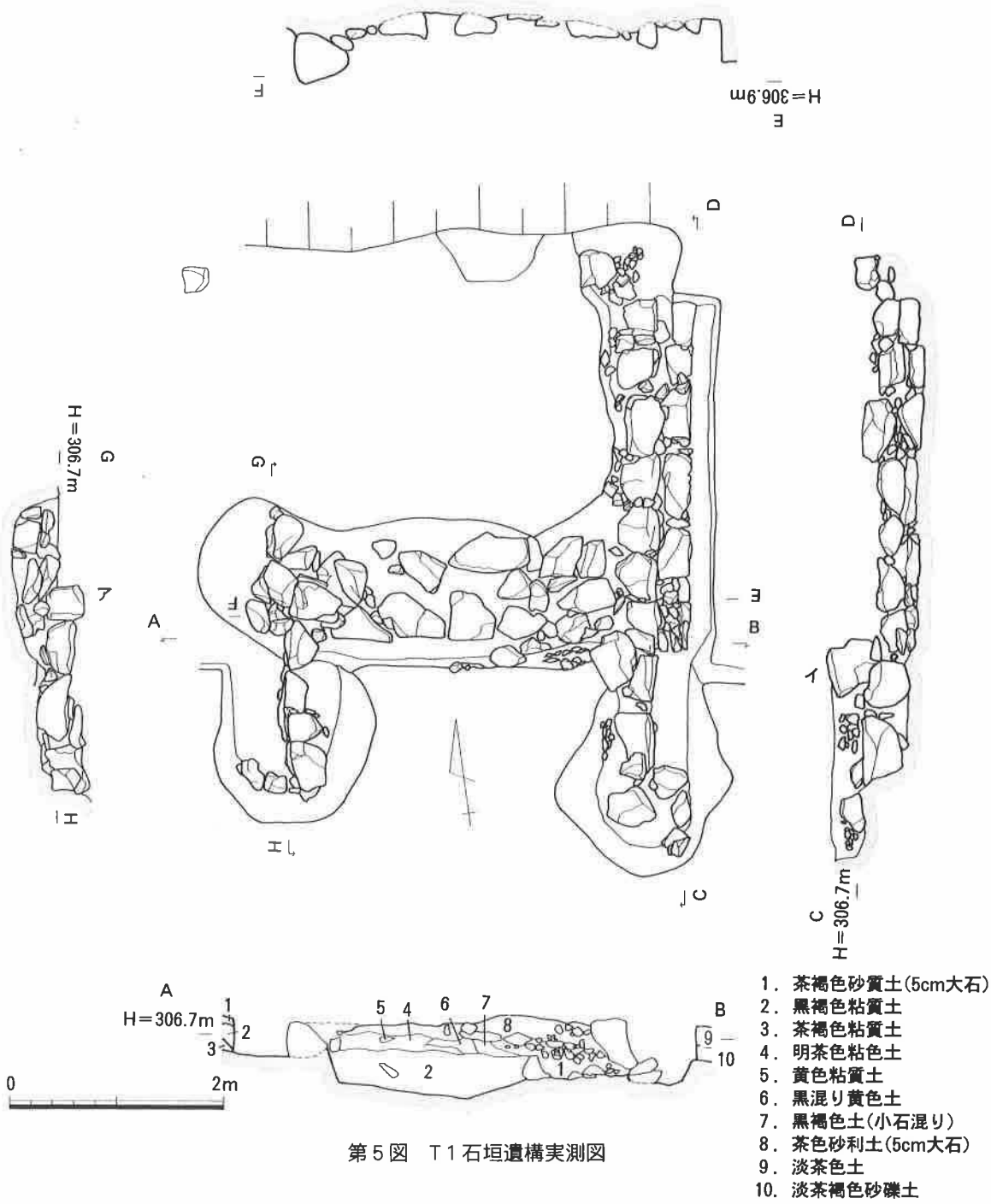
Ｔ３は、若宮屋敷跡の西側に設定した調査区で、幅1.5～３ｍ、長さ12.5ｍを測る。約15㎝の表土を剥ぐと、すぐに黄茶色の遺構面が現れた。遺構は、調査区東端で検出したSK1のみである。SK１は１ｍ×1.2ｍ、遺構面からの深さ約40㎝の土坑で、東側は町道からの進入路のために掘削されている。この土坑の底から、炭と土師皿がまとまって出土した。土師皿の中には、灯明皿と思われるタール痕が付着したものが混じっており、いままで上平寺城下で出土した土師皿一括遺構が、灯明皿を含まなかったことを考えると、これらとは性格を異にする遺構として注目される。

Ｔ４（第３図）

Ｔ３の一段下に設定した約4.5ｍ四方の調査区である。Ｔ３で遺構面を形成した暗黄茶色土が緩やかに傾斜しており、擂鉢・天目茶碗・土師皿などの遺物が埋土中から出土したものの、遺構は検出されなかった。



第４図　Ｔ２石列・礎石遺構実測図



第５図　Ｔ１石垣遺構実測図

出土遺物（第６図・第７図）

出土遺物には、土師皿・擂鉢等の国産陶器、火鉢、鉄製品、炭などがある。出土品のほとんどを土師皿が占める。このうち図化できたものは61点ある。

土師皿は、ほとんどが密な胎土をもち、焼成は良好である。色調は白茶色を呈するものが多い。

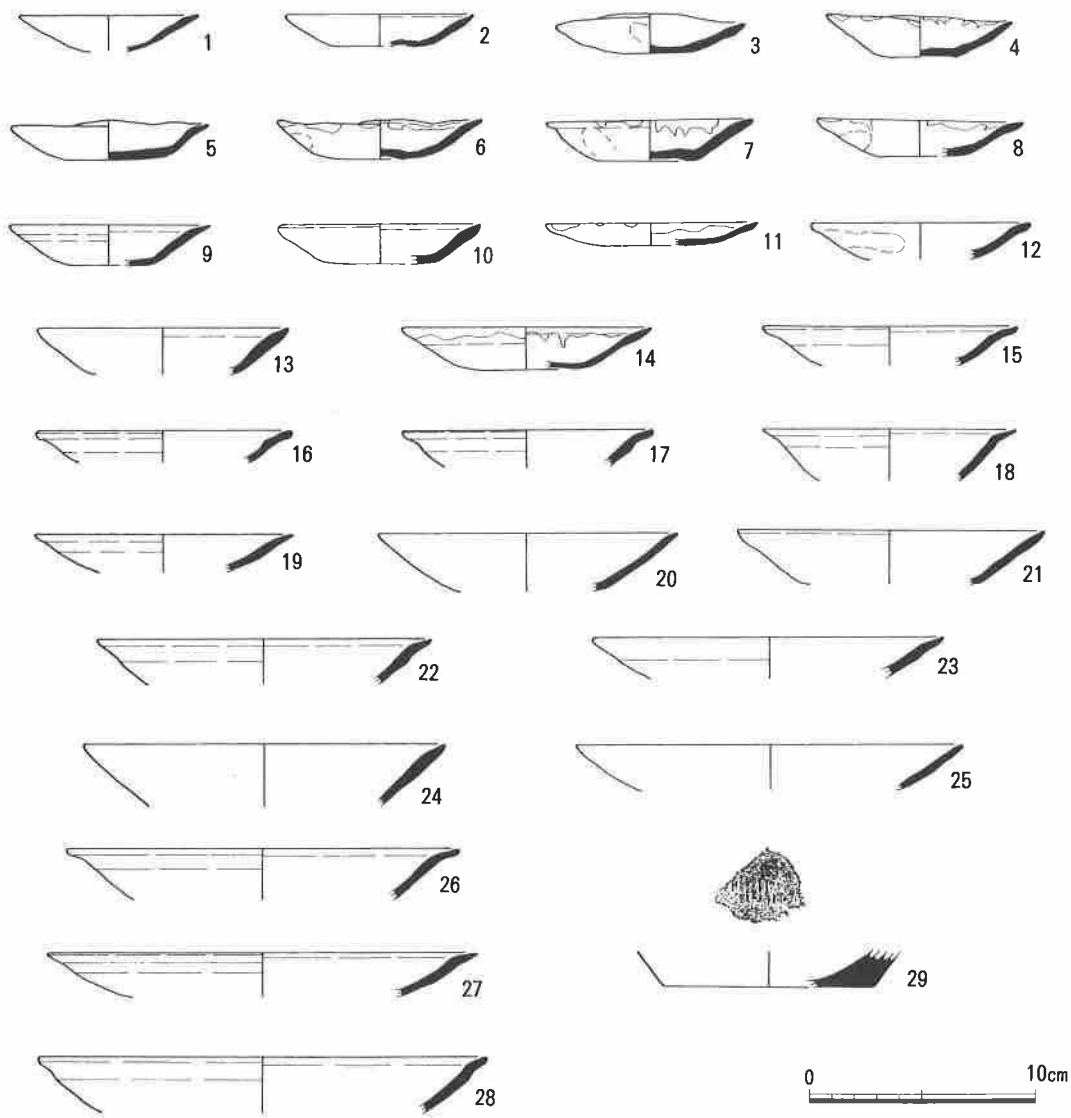
１～29は、Ｔ３SK1で出土した一括資料である。口径により仮分類すると、１～12は口径が8.0～9.3cmの小型品で、9.2cmが約半数を占める。13～19は、口径11cm台前半に集中する中型品。20～28は、13.5cm～19.0cmの大型品である。小型品の中には、城下町遺跡で

多く出土した7㎝台の成形が粗雑なものは見られない。3～7は完形で出土した。4・7の底部と体部の内面には指によるナデ上げの凹線が残る。多くの遺物が口縁部を強くなでてわずかに外反させている。4・6・7・8・11・14の口縁端部にはタール痕が付着している。灯明皿として使用されたものであろう。

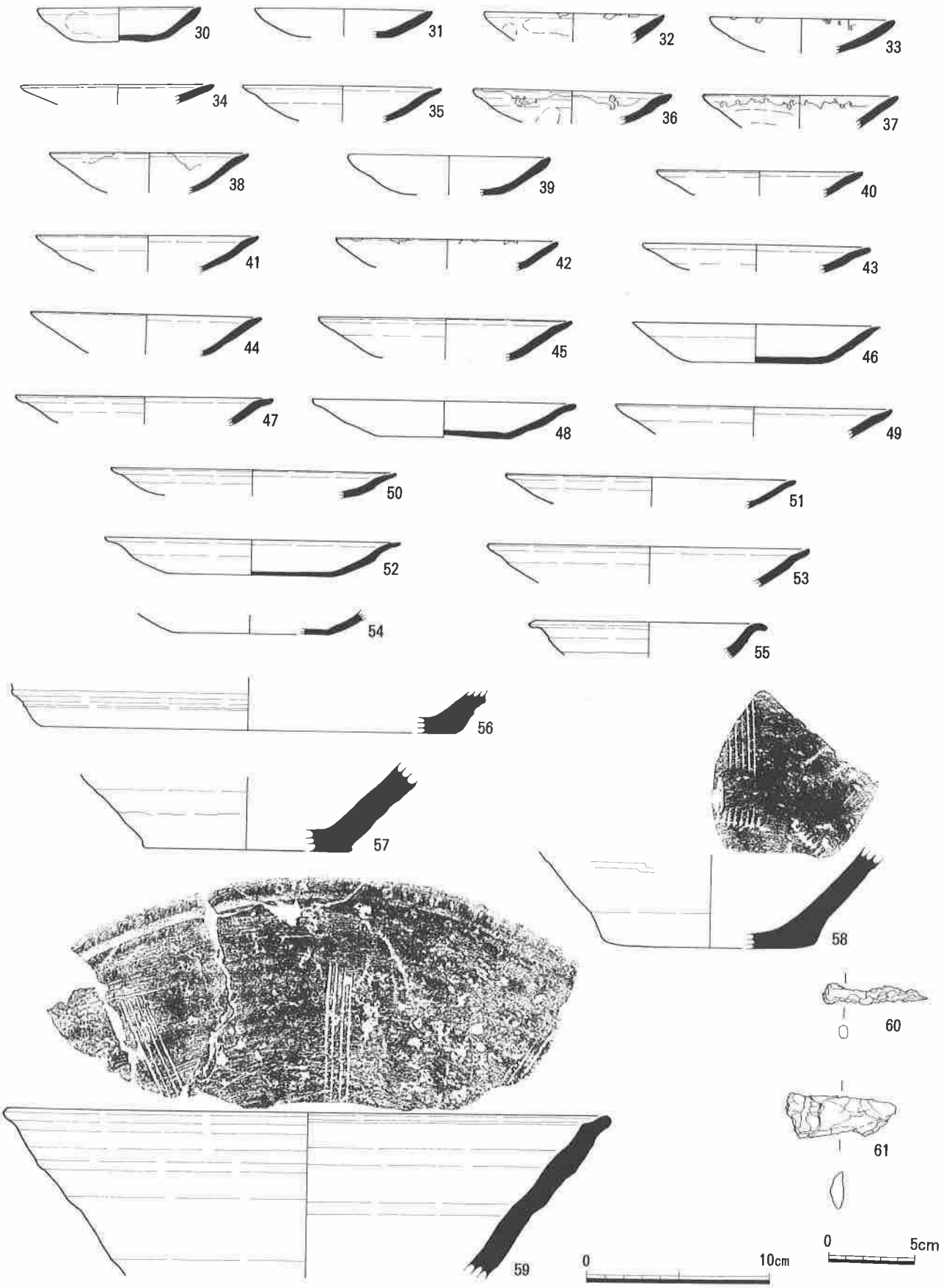
29は擂鉢の底部小片である。擂り目原体は9本以上である。

30～61は、その他、T1・T3・T4から出土した遺物で、このうち54までが土師皿である。44のみT1の石垣遺構内からの出土で、その他の土師皿は、全てT3からの出土である。口径は、30のみ8.9㎝の小型品で、焼成は堅緻で、暗茶灰色を呈す。中大型品の多くは、口縁部を横ナデにより外反させるものが多い。32・33・36・37・38・42は口縁端部の内外にタールが付着している。灯明皿として使用されたものであろう。

55は瀬戸美濃の端反皿である。口径約13cmを測り、薄緑色の釉が施されている。56は、瓦質火鉢の底部小片である。57～59は擂鉢で、58は8本の擂り目原体が確認できる。色調



第6図　出土遺物実測図(1)



第７図　出土遺物実測図（２）

は暗灰色である。59はＴ４から出土した。口径約33.2cmで、胎土は粗く焼成もやや甘い。

60は鉄釘で、Ｔ3から出土した。長さ約5.6cm、幅約0.6cmで、断面は四角形をしている。

第４章　まとめにかえて

上平寺城跡遺跡群は、北近江の守護大名京極高清が15世紀末から16世紀前半に整備した城館跡で、守護館と山城、城下町がセットで良好に残る全国的にも貴重な遺跡群である。

今日まで、それぞれの遺跡の地形測量を中心とする遺跡分布調査と、開発に伴う発掘調査を実施してきた。発掘調査は、主に城下町部分が対象で、掘立柱建物や石組井戸を検出して城下町の存在を確認したが、今回、ごく狭い範囲ではあるが、はじめて『絵図』に家臣団の名称が記載された屋敷区画を調査する機会を得た。

Ｔ1から出土した石垣遺構は、２段程度しか残っていなかったものの、石垣に裏込め石を詰めていることや、角に立石を置いていることなどから、明らかに石垣として築かれたものである。屋敷の内部にあることから建物を区画する築地の基礎か門部分にあたる３～４段の石垣ではないだろうか。

日本の城郭に石垣が用いられたのは、基本的に天正四年（1567）の安土城が始まりとされている。しかし、近江では守護大名六角氏の観音寺城で1530年代中ごろに採用されており、浅井氏の小谷城や鎌刃城でも石垣が検出されており、石垣に関して先進的な地域であった。

こうした状況下で、今回京極氏の居城で石垣が発見された意義は大きく、家臣団屋敷を含む上平寺城下の廃城が大永三年（1523）と考えられ、石垣から出土した土師皿も京極期のものであることから、今回の石垣は城郭に用いられたものとしては古いものであり、北近江守護の京極氏の城館から発見されたことは、近江の城郭石垣の特殊性を示す資料のひとつとなる。

また、浅見氏屋敷の調査では、屋敷を区画する塀の礎石と雨落ち溝らしき遺構を検出し、家臣屋敷の建造物の構造を垣間見る調査になった。平成10～12年度に調査した城下町地区では、石組井戸以外に石を用いた遺構は見られず、建造物は全て掘立柱建物であった。今回、家臣屋敷で築地や門、塀にともなう可能性がある遺構を検出し、階層の差で屋敷内部や建造物の構造に違いがあることを明らかにすることができた貴重な調査となった。

図　　版

調査風景

T1 全景

T2 全景

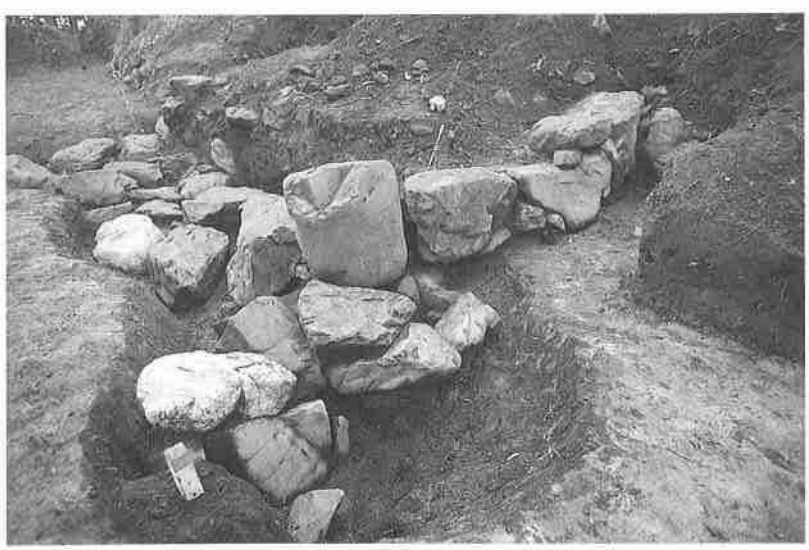
T３全景

T４全景

T３土師皿一括出土遺構

石垣遺構全景

石垣遺構中心部



石垣遺構西側

報 告 書 抄 録

ふりがな	じょうへいじじょうあといせきぐん すいていわかみや・あさみやしきあとはっくつちょうさほうこくしょ
書名	上平寺城跡遺跡群　推定若宮・浅見屋敷跡 発掘調査報告書
シリーズ名	伊吹町文化財調査報告書
シリーズ番号	第15集
編著者名	髙橋順之
編集機関	伊吹町教育委員会
所在地	滋賀県坂田郡伊吹町春照37
発行年月日	平成14年3月

所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査面積 ㎡	調査機関	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高殿地区 （上平寺南館遺跡）	坂田郡伊吹町 大字上平寺 字高殿	25496	462-045	35度 22分 55秒	136度 25分 10秒	240	990,000 ～ 000,000	町道改良 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高殿地区	屋敷跡	戦国時代	石垣・礎石 石組溝	土師皿・端反皿・擂鉢	

伊吹町文化財調査報告書第15集
上平寺城跡遺跡群
推定若宮・浅見屋敷跡
2002年3月
編集・発行　伊吹町教育委員会
滋賀県坂田郡伊吹町春照37番地
TEL　0749-58-1121
印刷　立木印刷